

目の不自由な人も楽しめる音声ガイド付きの映画鑑賞会などを実施するボランティア団体が、手作りのバリアフリー映画祭を1月20日に都内で主催する。設立7年目で初の試みだ。

*

この団体は、首都圏を中心に活動している「シティ・ライツ」(平塚千穂子代表)。「障害の有無にかかわらず力を合わせ、共に映画を楽しむ」を言葉に、2001年に設立。会員約200人のうち約半数が視覚障害者だ。

音声ガイドは、目の不自由な人がスクリーン映像をイメージできるよう、せりふ以外の情景を言葉に置き換えて説明するもの。客

視覚障害者と健常者が協力

席の鑑賞者は、その音声をFMラジオの受信機で聞く。

同団体は、劇場や上映会主催者からの依頼を受け、音声ガイド作りなどを協力してきた。今回は「自分たちの手で一から上映会を企画してみよう」と映画祭を主催。上映したい映画を自ら選び、台本作りや音声ガイドの吹き込み、会場探し、チケットやポスターのデザイン、鑑賞者募集など、上映に向けた様々な準備を半年かけて自分たちで行ってきた。障害者たちもボランティアとして参画している。

手作り 音声ガイド付き映画祭



チラシを手に映画祭をアピールする実行委員会のメンバー―大浦哲撮影

上映作品は「ミルクのひかり」

(05年イタリア)、「善き人のためのソナタ」(06年ドイツ)の2本。実在する盲目の音響技師の少年時代を描き、「目が見えなくても映画は行けるよ」というせりふがある「ミルク」では、登場人物約20人の声を演じる声優として視覚障害者たちも参加している。

映画の幕あいではボランティアが対談。映像を音声で伝えることの苦労など、音声ガイド作りの舞台裏を明かす。

強度の弱視で団体設立時からの

メンバー、斎藤恵子さん(40)は障害者と健常者が協力して作り上げる映画祭。目の見える人もぜひ、音声ガイド付き映画を体験してほしい」と話している。

同団体は視覚障害者と健常者が共に映画を鑑賞できる「バリアフリー映画館」の建設を将来の目標としており、この映画祭を、目標実現に向けた第一歩にしたいと意気込んでいる。

映画祭は、東京・南青山の梅窓院祖師堂ホール(地下鉄銀座線外苑前駅1a出口)で、正午開場。入場料は1作品500円。シティ・ライツのホームページ(<http://www.citylights.org>)から申し込みことになる。